

高校地理必修化を踏まえた自然地理学習

社会科専修・川瀬久美子

1. 授業の概要

これまで本授業の受講生の高等学校での地理の履修率は低い傾向にあったが、2022年から高等学校で「地理総合」が必修となる。高等学校で多くの生徒が地理を学習することになることは喜ばしい一方、大学で地理学を専攻したところか、高校で地理の履修したことのない地歴科教員が、「地理総合」を担当する状況が予想される。地理的能力やものの見方・考え方や地理学の面白さを生徒に教示できる教員の養成が急務である。

本授業の目的は、自然と共存する社会形成に必要な知識を学び、自然地理学的な環境理解を私達の社会・文化生活に関連づけて身に付けることである。

例年は、毎時間、予習>>答え合わせ・解説>>演習 の手順で進め、時間外学習として必ず予習をして授業に臨むこととしている。まず、事前に次の授業の内容の要点を整理したプリント（A4サイズ1枚）を配布し、教科書を参考にしながら空欄（主に地理学用語、しばしばグラフや図の読み取り）に記入してくるよう指示する。授業では、冒頭5分ほどで教員が受講生を指名して全体で答え合わせをする。その際、プリントの記載に沿って教員が事項の解説を行う。答え合わせの後、パワーポイントを用いて、教科書の図表や教員の用意した地理写真を提示し、受講生の理解を深める。残りの時間（1時間ほど）で、資料映像の視聴（7回）や地形図の読図（3回）、いくつかの課題（火山灰層序の模擬課題、水資源問題の解決など）を行う。今年度は、新型コロナウイルスによって、学期途中で対面授業から遠隔授業に切り替わる可能性があったため、学期の序盤で地形図の読図を含む作業課題を実施した。その後、テキストおよびプリントの授業内容に入り、関連する内容について適宜、序盤で行った課題への振り返りをした。

2. 受講生の高校地理の履修歴

受講生は22名（1回生21名、4回生1名）である。学期初めに地理の履修歴および自然地理学と内容的に重複する部分のある地学の履修歴について、アンケート調査を行った。以下は履修したことのある人数である。

地理 A	2名
地理 B	5名
（うち地理 B センター試験受験者 3名）	
地学基礎	16名

地理 A・B も地学基礎も履修したことのない受講生が4名いた。その4名（18.2%）は、高等学校において自然地理的な内容に関してはほとんど学習経験がないことになる。一方、地学も含めると自然地理学的な内容の学習経験を18名（81.8%）が有するが、人文地理的な学習は6名（1名は地理 A・B 両方の履修経験があった）以外、高校で経験しておらず、その比率は7割を超える。

地学が地震や気象など自然地理学的内容と近いとはいえ、自然現象の理解そのものを学習目的とする地学と、地域によって多様な人間生活の基礎条件として自然現象を捉える自然地理学では、学習の視点や展開は異なっている。

3. DP 調査結果

学期末に実施した DP 調査の結果は以下の通りである。

①教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している（知識・理解）

とてもそう思う	(50%)
ある程度そう思う	(50%)

②教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている（技能）

とてもそう思う	(27.8%)
ある程度そう思う	(69.4%)
無関係である	(2.8%)

③教育現場で生じているさまざまな現代的

諸課題について、専門的な知見をもとに、その対応方策を理論に基づいて総合的に考え、その過程や結果を適切に表現することができる（思考・判断・表現）

とてもそう思う (44.4%)

ある程度そう思う (52.8%)

あまりそう思わない (2.8%)

④教師としての使命感や責任感を持ち、自己の課題を明確にして理論と実践とを結びつけた主体的な学習ができ、自主的に社会に貢献しようとする（興味・関心・意欲、態度）

とてもそう思う (38.9%)

ある程度そう思う (58.3%)

あまりそう思わない (2.8%)

4. 考察

本年度の授業では初回に、2022年度から高校地理が必修科目となることを説明し、将来、それぞれの受講生が高等学校の教員となった場合、学校現場において地理科目を担当する可能性が高まっていることを理解させた。また、序盤の作業課題では、自然災害や水資源など、自然地理学的知識や理解が私達の暮らしにどのように関係しているのかを、動画資料やグラフなどを用いて考えさせる機会を設けた。このような授業展開から、DP調査の結果、比較的高い評価が得られたものと考えられる。

これまで、中学校社会の地理学習以来地理の学びに触れていない受講生と、センター試験や大学入試の二次試験を地理で受験した学生という、知識の差が大きな受講生が同時に存在していたため、本授業では非常に基本的な事項から発展的な内容までを授業に組み込む苦労があった。しかし、5年後には高等学校で「地理総合」を学んだ生徒が大学に入学する予定である。大学の地理の授業で、地理の知識や地理的ものの見方・考え方の基礎をすでに身につけている受講生に対して発展的な地理教育をするためにも、高等学校の「地理総合」の充実した教育実践ができる教員を育成していく必要がある。